

建築再生展：住宅リフォーム推進協議会セミナー

インテリアで決まるリノベ価値

～木の文化が“住みごたえ”を醸成する～

生活空間研究室 代表

日本インテリアプランナー協会関西 理事

日本インテリア学会 理事・関西支部長

中村孝之

1. 住宅市場から生活市場へ

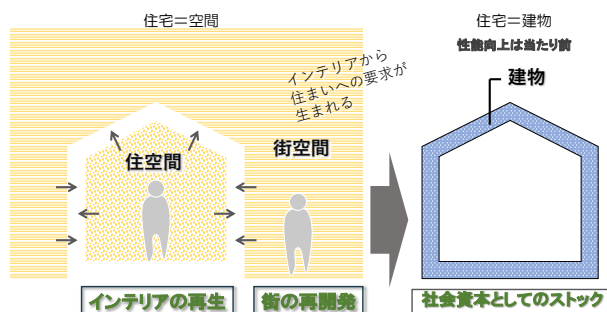
○これまでの住宅市場

- ・新築需要を中心に、社会資本を形成していく中で、建物の性能は進化してきた。
- ・建物ができると、内部空間ができることで、インテリア市場が形成されてきた。

○これからの住宅市場

- ・基本性能を現在の要求水準に上げていくことは基本。
- ・性能の高い既存住宅の増加とともに、建てることよりインテリアによる暮らしの再生が、住宅への投資のポイントになる。

期待を上回る新しい生活の発見、納得による暮らしの価値を提供するために、インテリアができることを考えてほしい。

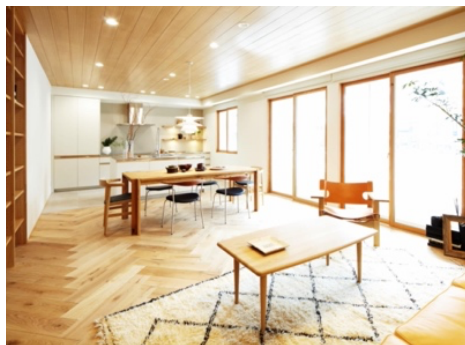


○生活が豊かになるコトにお金を使いたい

旅行、グルメ、趣味など、暮らしのレベルアップの選択肢が、リノベーションの競合相手。

さまざまな暮らしの価値の中から、住まいへの投資を選択してもらうためにインテリアによる住みごたえを提案してみよう。

○インテリアのレベルアップとして、受け入れられやすいデザインの基盤要素として、木の文化を取り上げる。



ACTUS リノベーションショールーム HOW

2. 木の文化とは

○日本の住宅・インテリア材料のルーツ

身近な植物系の自然素材が使われてきた。

・木材の原点は里山

日本には数多くの山があり、自然環境の季節変化があり、森林と水源の豊富な恵まれた環境である。

日本の森林には、生態系が作り出した豊富な樹種がある。この雑木林から、樹種の特徴を活かして利用してきた。この恵みを取り入れた空間が心地よいことを、日本人の DNA は知っている。

・伝統的な銘木は、檜・欅・栃・杉・孟宗竹・黒檀・肥松・・・。

今、インテリアに使われる広葉樹は、ホワイトオークやブラックウォルナットだが、その仲間である、コナラやミズナラ、オニグルミなどは日本の里山にある樹種。

・国産の広葉樹の利用が見直され、使った分を植樹して循環させる生態系保全の取り組みも、始まっている。

○インテリアに、日本の里山からやってくる木は少ないが、親しんできた里山の樹種の仲間は心地よい。

3. 木質空間のデザイン

○北欧のインテリアに学ぶ

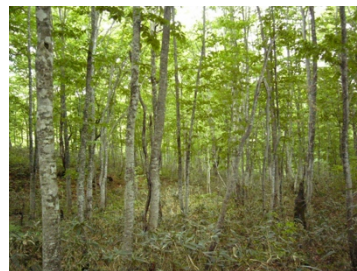
長く変わることなく、木の文化が受け継がれる北欧のインテリアスタイルから、住みごたえを感じる住空間のデザインを考えよう。

■空間構成のバランス→木の使い分け、木の配分の仕方を考える。

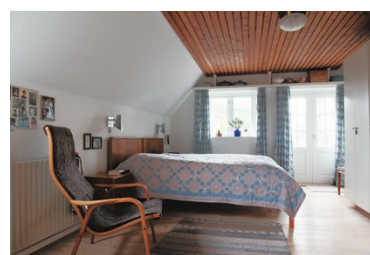
空間の中に、程よい面積で木質仕上げが入っていると心地よい。樹種やカラーのバランスも、インテリアには効果的。

■表情が豊かな構成要素→木質感の表情には、木の厚みがわかる構成や曲木、これまで欠点とされてきた節や広葉樹のキャラクターといった、木の持つ自然な風合いをそのまま使うことが見直されている。また、気に入ったアートやプロダクトをさりげなく配置することで暮らしに溶け込むインテリアとなる。

■無垢材の触感から愛着へ→使いこむほど愛着を感じる無垢材を取り入れる。



秋田県森林組合が管理するブナ林



本物の木は、金属や樹脂に比べて暖かく、しっとり感があり、触れた時のストレスが少ない。プリント技術は進んでいるが、視覚は騙せても触覚は騙せない。手の触れるところには本物を使おう。

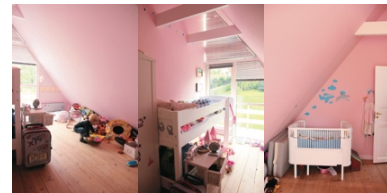


4. 子どもを育むインテリア

○子どもの生きる力の重要発達期

感性、身体、知性、社会性が発達して大人になっている。それぞれの発達に大切な時期がある。

(積水ハウス「子どもの生きる力を育む住まいづくり」より)



以上 6 点 : ACTUS STYLE BOOK vol.9

○子どもを育むインテリア

- ・感性が発達する幼児期に、本物の木材を使った空間を与えて、本物がわかる感性を育てほしい。
- ・感性の発達が多くの体感を生み、そこから多くの興味が生まれ、観察したり質問したりすることから知性が始まる。
- ・欧米では、小さい頃に子ども部屋を与えることが多く、勉強部屋でなく自分のものを管理したり部屋を飾ったりすることや、一人になることで自律を育むと言われる。
- ・菜園ガーデンは、生命の成長、虫などの生態系、収穫、調理、味覚、ごみの処理、循環という流れを知ること、感性、身体、知性の発達に役立つ。

5. 住みごたえを醸成するインテリア

○インテリアは、日々の暮らしの中に住みごたえを提供することができる。

○住みごたえを醸成するインテリア

性能向上+日本人の感性に響くデザイン

○感性に響くデザイン

- ・愛着を持っていつまでも利用したくなる「恒久性」と、自分の好きなインテリアをアレンジできる「柔軟性」を併せ持つこと。
- ・日本人の感性に響く素材を身近な空間に取り入れると、人と空間の距離が近づく。
 - ① そこにいることに愛着が湧き、いる時間が長くなる。
 - ② 自分で飾ることが楽しくなり、人を呼びたくなる。
 - ③ 掃除や手入れ、修理をしたくなり、住宅の長期耐用性につながる。

中村孝之

tnakamura4140@gmail.com

積水ハウス（株）での生活研究、インテリア商品開発を経て、
(株) アクタスの空間プロデュース、リノベーション設計と、
京都大学大学院医学研究科人間健康科学研究などを実施